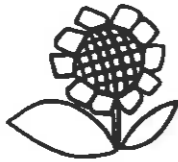




開所日時 月・水・木・金曜日
15時～18時
土曜日 10時～13時
児童デイ



宿泊研修を終えて

7月19日(日)から20日(月)にかけて、一宮まごころの広場で障がいをもつ児童のご家族による宿泊研修が開かれました。

両日で述べ28人のご家族がバーベキューや花火、銭湯、竹細工、スイカ割り、流しそうめんの体験を通して親子のふれあいを楽しみました。

2日目には「竹缶ポックリ」を作りました。太い竹をノコギリで1足ずつ切り、職員に紐を通してもらって完成です。遊び方に戸惑う子、怖がる子もいましたが、次第に慣れて、友達とカボカが競争する姿がみられました。その後のスイカ割りでは、誤ってスイカを凍らせてしまったハプニングもありましたが、凍ったスイカがあんなにも甘くて美味しいなんて初めて知りました。やってみなければ分からないことがこの宿泊研修ではたくさん見つかりました。

「自宅以外の場所で泊まったことがないので心配です。」と不安だったお母さんや「こどもが行きたいと言ったので、一緒に参加しました。」とおっしゃるご家族も、「とってもいい経験になりました！」と喜んでみえました。

この宿泊を企画されたご家族も、子ども達の楽しむ姿に接して大変喜んでおられました。

お疲れ様でした。ご協力頂いたみなさん、ありがとうございました。



流しそうめんの様子



凍っていてなかなか割れないスイカ!

介護事故～ヒヤリハット～

一宮市介護事業者連絡協議会
訪問部会研修より

事例1

訪問しておむつ交換をする際に、カーテンを閉め忘れた。利用者位置からは外を歩いている人が見えるが、そのままおむつ交換をした。

事例2

訪問予定時間に間に合わないと判断し、事業所に連絡した。実際10分遅れてしまったが、事業所から利用者宅には連絡が行っていた。

事例3

ケアプランに服薬確認のある利用者宅に訪問した際に、ご本人が「薬は飲みました。」と言われたので、そのことをもって確認したこととした。利用者は軽度の認知症がある。

1・2・3の事例は、いずれも介護事故と思われる。実際、介護する側に「介護事故」という認識があるかどうかが問題で、介護サービス提供者側に過失がある・なしに関わらず、利用者への身体的・精神的・物質的・経済的被害をもたらすものが介護事故と言えます。

日常生活の中で、不都合、不具合が意識化されると「ヒヤッと、ハッと！」したりする経験が頻繁にみられ、これらは、介護の技術の未熟さや手順忘れ、手順間違い、手順飛ばしなど不適切な対応によってもたらされます。

介護事故を予防するために…

- ・ ヒヤリハットを減少させていくこと。
不具合の意識化を行う。利用者宅では自分のアンテナを全開して対応する。
- ・ 「介護事故」「ヒヤリハット」の報告書の提出を徹底し、再発防止を認識させる。
- ・ 事故防止対策を講じるというだけでなく、介護職全体の「質の向上」を目指す。
在宅の現場ではヘルパーが一人で対応しなければならず、知識・経験も必要となります。事業所においても、多岐にわたる研修を重ねて行きたいと思えます。

ミニデイだよ



流しそうめん

今年の夏は梅雨明けが長引きました。いつもミニデイの昼食後に、行っている散歩に出掛けることもしばらくできませんでした。

そんな中、事務所のガレージでの『流しそうめん』を企画しました。長い竹を切ってきて縦に割り、節を削って手作りした由緒正しい(?)流しそうめん!

最初はちょっと「面倒だな…」とおっしゃられていた利用者さんも、流れていくそうめんを目の前にして、取らずにはいられないようです。座って召し上がっていた方も、徐々に腰が上がり、いつもと違う雰囲気思わず箸がすすんで、皆さんたくさん召し上がられました。

「たまにはこういうのも良いね～」 「若い頃はよくやったよ。懐かしいなあ」と笑顔がほころんでみえました。ジメジメとした梅雨の季節を一時忘れた楽しい昼食の時間でした。



押し花飾りの作品です

心っれづれ



黄門さまの御殿

梅雨に入る前の六月、電車を乗り継いで茨城県常陸太田市へぶらり旅となりました。今回の目的地は『修史編纂事業』(後の『大日本史』と命名された書)に情熱を注がれた、水戸のご老公が隠居宅とした「西山荘(せいざんそう)」です。

三河(名古屋)を午後5時に立出し、猪の刻(午後10時)に到着した常陸太田の宿には、小さいながらも人をもてなす雰囲気にあふれ、静かに降り注ぐ雨にもこの地特有の優しさが感じられました。

明朝は、雨の中を七つ発ち(午前4時)ならぬ五つ発ち(午前8時)で、宿のおかみに見送られ、西山の里の豊かな自然の表情を眺めつつ歩みを進めました。

西山荘に近づくにつれ、元禄の華美を嫌われた光圀公の心情が伝わる侘まいに、うなずきながら、領民たちと親しく交わり「アッハハハ！」と笑っておられる黄門さまを想い浮かべました。

お客様が通る表門は、周囲の木立に合わせて自ら考案された「簡素」な門であるのに対し、通用門は茅葺にクヌギの丸太を柱とした立派なもので、そこを出入りする家臣や近所の領民たちへの心遣いを感じ入ります。また、いばら科のあずきなし、浜梨、山査子、果李など薬用や染料となるものを植えられ、「簡素」を实践された黄門さまの人柄にふれ、領民、家臣と共に自然を愛でつつ、63歳で隠居生活に入られた黄門さまの生活ぶりを知る一日でした。

あいち福祉医療専門学校
岡村 茂

